

佳作

尊敬する人

福岡県 福岡県立筑紫丘高等学校二年 原鈴夏

私の尊敬する人、それは祖父です。私の祖父は長崎県の壱岐で生まれました。中学校を卒業してすぐに祖父は寿司職人になるための修業をするために親の反対を押し切って一人で福岡に来ました。そして十五歳のときからとある有名な寿司屋で修業を始めました。もちろん最初から寿司の握り方、和食の作り方を教えてくれるわけではなく、出前の配達や掃除などの仕事から始まりました。そして辛い十二年間の修業を経て、同じ店で働いていた祖母と独立し、店を出しました。それからも必死に必死に働き、店を開いてから昨年で三十年目を迎えることができました。

料理人という仕事は、立ち仕事なので祖父は年を重ねるにつれ足腰が弱くなってきました。修業を始めたのが一九六四年の東京オリンピックが開催された年だったので、二〇二〇年の東京オリンピックまで仕事を頑張ると祖父は話していました。しかし、新型コロナウイルスの影響で二〇二〇年に開催されるはずだった東京オリンピ

ックが二〇二一年に延期されました。そして祖父は二〇二一年までお店を続けることを決意しました。

そのような中、緊急事態宣言による自粛要請で出前をしてくださるお客様が増えました。大変な自粛期間でしたが、祖父の握るおいしい寿司を食べてくださるお客様が増えたのは良かったなと思います。それからは緊急事態宣言が解除されたり、また時短が要請されたりなど、の選択が正しいのか分からない不安定な日々を過ごしました。

そしていよいよ二〇二一年に入りました。一月から店を閉めた五月の終わりまで、あつという間でした。店を閉めることはごく一部のお客様にしか言っていなかったのですが何も変わらずに営業をすることができました。祖父が昔から寿司を食べに来てくれていた常連さんに店を閉めることを伝えるとそのお客様はお泣きになりました。その光景を見たとき、私は祖父、祖父の握る寿司、そしてお店そのものが愛されているのだと思いました。お客様の前に立ち寿司を握る祖父は本当に輝いて見えます。その輝きは、苦しい期間があったからこそだと思います。そんな若い時からずっと一生懸命頑張ってきた祖父がみんなから認められたような気がして本当にうれしかったです。

二〇二一年五月に入ったときはまだまん延防止等重点措置のためにお酒を提供することができませんでした。

お店を閉める最後の一月はお酒を出せたらいいなと願

っていました。それは叶いませんでした。五月に入ってから来ていただいたお客様全員に店を閉めることをお伝えしました。私は寿司や和食を食べるときは大人は生ビールやおいしい日本酒を飲みたいと思うだろうからあまりお店に来られる方は少ないと内心思っていました。しかし予想に反してたくさんのお客様がお店に来てくださり大繁盛しました。予約でほぼ席がうまり、予約を取れなかったお客様がわざわざお店に来て、

「やっぱり空いてないですね。」

とお尋ねになるほど繁盛していました。祖父の最後の店での思い出が良い物になって本当に良かったです。またなにより嬉しいうことがあります。それはお客様が帰られるときに、

「やっぱり大将の握る寿司はおいしいし、大将や奥さんと話すのは楽しい。この店に来るといつも幸せな気持ちでいっぱいになるよ。」

と言ってくださったのです。私は言葉では言い表せないほどの感慨深い何かを感じました。新型コロナウイルスのため満足のいく営業はできませんでしたが、祖父が若い時から一生懸命頑張ってきたことを祖父の寿司を食べた方々に認められたような気がして良かったなと思います。そして良い思い出をたくさん作り店を畳むことができて祖父は思い残すことは何もないと思います。

祖父はいつも私に言ってくれます。

「目の前のことを一生懸命頑張れなさい。」
と。この言葉を心に刻み、祖父のようにみんなから愛され、慕われる人になれるように頑張ります。